

Z114a **日本におけるクラシカルな光学機械式プラネタリウムの研究資源としての価値——ツァイス III型を手がかりに——**

井上毅（明石市立天文科学館）、嘉数次人（大阪市立科学館）、毛利勝廣（名古屋市科学館/名古屋市立大学）

プラネタリウム 100 周年を契機として、クラシカルな光学機械式プラネタリウムに対する関心が世界的に高まっている。光学式プラネタリウムはツァイス社によって開発され、1923 年ツァイス I 型が試験公開された。1926 年に発表されたツァイス II 型では緯度変化が可能となり、プラネタリウムは世界に広がった。ツァイス III 型は、戦後の西ドイツ・カールツァイス社によって既存の II 型を改造した過渡的なモデルであり、南アフリカのヨハネスブルグやドイツ・ニュルンベルクなどに設置された。III 型は輝星投影機構など、IV 型へと続く新要素を持つが、これまで詳しく調査されてこなかった。一方、日本には III 型そのものは存在しないが、大阪市立科学館に大阪市立電気科学館のツァイス II 型、渋谷区総合文化センター大和田に天文博物館五島プラネタリウムのツァイス IV 型、名古屋市科学館にツァイス IV 型（動態展示）、そして明石市立天文科学館に東独ツァイス UPP23/3（稼働中）があるなど、戦後の東西両ツァイス社による代表的機種が現存している。これらの機体群は、ツァイス III 型を含む世界の光学プラネタリウムの系譜を理解する上で重要な比較対象である。日本国内には、クラシカルな光学機械式プラネタリウムの代表的な系統の投影機が保存され、明石や名古屋のように動作状況を確認できる投影機もあるなど、国際的にも珍しい状況といえる。

本発表では、ツァイス III 型の特徴と歴史的意義を紹介するとともに、日本に現存するプラネタリウム投影機が、プラネタリウム史研究において有用な研究基盤となり得ることを示す。